

自給飼料生産優良事例 No.15

かぶしがいしゃ
○株式会社ウエストカントリー

飼料生産組織—岡山県新見市—令和7年10月現地調査

岡山県新見市の株式会社ウエストカントリーは、建設業を母体とした強みを生かした高度な機械整備・管理技術により、地域の飼料生産体制の運用に大きく貢献しているコントラクターである。新見市農業技術者連絡協議会との連携により耕種農家への圃場管理・水管理の指導を行い、42ha でイネWCSの低コスト生産を行っている。ブランド「千屋牛」の振興に向けて、生産者と関係機関の明確な役割分担と連携により地域の活性化に取り組み、成果をあげている事例である。



1. 概要

株式会社ウエストカントリー（以下、ウエストカントリーと略す）は、安定的な地域の飼料生産体系の確立を目的として、地元関係者の要望に応えて新見市で建設業を営む西村工業により平成20年に設立された、新見市で唯一のコントラクターである。遊休化した建設機械とオペレーターを農業に転用し、効率的な運用を図ることで、令和6年度には自社分5.2haを含む42.1haで低コストのイネWCS生産を行っている。

ウエストカントリーの受託作業は水田の耕転から代掻き（移植作業は委託）、収穫・調製作業までであり、生産物の運搬と販売は主に晴れの国岡山農業協同組合が担っている。また、新見市農業技術者連絡協議会との連携により耕種農家への圃場管理・水管理の指導を行い、地域全体でのイネWCSの品質向上が図られている。さらに、建設業の経験を活かした計画的な機械整備により、減価償却費を県平均の半分以下に抑え、高い稼働率を実現している。地域内の面積拡大には限界があるものの、県内広域の情報交換を行い、広域対応による受託面積の拡大に向けて工夫を凝らしている。

ウエストカントリーは、建設業を母体とする強みを生かした高度な機械整備・管理技術により、地域の飼料生産体系の運用に大きく寄与しているコントラクターであり、ブランド「千屋牛」の振興に向けて、行政、農協、生産者の役割分担と連携により、一丸となって地域の活性化に取り組んでいる事例として参考になる。

2. 経営の特徴

ブランド千屋牛1,000頭増頭計画」における飼料需要を支えるべく、建設業を営む西村工業株式会社（昭和62年創業、社員19名）が平成20年にウエストカントリーを設立し、人員・機械不足に悩む農業公社から機械と業務を引き継ぎ、コントラクター事業に新規参入した。現在、労働力は4名（役員2名、臨時雇用2名）で、代表の三上氏は西村工業の社長も兼務しているが、臨時雇用2名は農作業専従である。

自社生産する水田面積は5.2ha、収穫作業の受託面積は36.9haで、栽培品種は、当初は子実多収タイプの「クサノホシ」であったが、連絡協議会や研修会を通じて、茎葉多収タイプの極短穂型品種の栽培要請があり、現在では「つきあやか」「たちすずか」に集約されている。令和6年度には最新型の汎用型微細断飼料収穫機と自走ラッピングマシンを導入し、雇用人数を増加させること無く作業受託面積を設立時の10.2haから4倍の42.1haにまで拡大している。この受託面積の拡大は、県北東部のコントラクターから依頼を受けた結果でもあり、人手不足・高齢化に悩む地域の畜産経営にとって無くてはならない存在となっていることの証左でもある。

コントラクターにとって、作業機械の購入・維持管理費と人件費は生産費に占める割合が大きい。ウエストカントリーは建設会社から参入した強みを生かして、所有機械は収穫機のみとし、的確な点検補修により耐用年数を伸ばし、過剰投資や減価償却費を抑制している。また、農協との協業が物流・販売効率の最適化とコスト低減につながっている。

ウエストカントリーは新見市農業技術者連絡協議会と連携し、WCS用イネの生育ステージに応じて圃場巡回や水管理指導を実施し、落水の適期指示など耕種農家への助言を行い品質確保につなげている。また、地元建設業を母体とする強みを生かし、耕作放棄水田の整地、改良にも取り組んできた。生産される高い嗜好性を持つイネWCSは、地元のブランド「千屋牛」生産の中核的存在である大規模肉用牛経営や、高齢化に悩む地域の小規模繁殖農家 10 戸に供給され、地域の畜産業を支えている。

3. 土地利用

現在の飼料生産面積は 42.1ha で、うち 5.2ha が自社所有である。狭小・複雑な中山間地域であるため、圃場は一筆が広くても 20a であり、平均 10a の圃場 70~80 枚において収穫・調製を行っている。そのような状況であるため、まとまった 50a 以上となる圃場群を請け負い、団地化することによって生産効率を確保している。

また、新見地域の畜産農家への粗飼料供給を優先するように努める一方で、他地域（県北東部美作地域）での受託を行うことで岡山県全体の土地利用の向上に貢献している。

4. 飼料生産

WCS用イネについては、収穫適期幅の広い極短穂型品種「たちあやか」「たちすずか」が栽培されている(写真1)。



写真1. 作業収穫を委託している
生産者圃場のたちすずか
(手前の電柵はイノシシ対策)

育苗については農協が担当し、栽培、水管理は耕種農家、収穫はウエストカントリー、ロール搬送はユニックによる吊り上げ方法でウエストカントリーが大規模肉用牛経営へ、畜産農家 10 戸への配布は農協が担当しており効率的な分業が行われている。連絡協議会、県普及所、ウエストカントリーの3者で出穂前後に生育等の確認を行い、連絡協議会が収穫計画を設定している。また、収穫作業は新見市分の圃場を終えた後、他地域の津山市の圃場に微細断収穫機を移動させて対応しており、より広域の栽培・収穫作業計画の設定が不可欠となっている。

ロール管理については、生産履歴として圃場Noの確認がなされており、追跡可能な形になっている。自社圃場で収穫されたイネWCSの飼料成分含量(乾物中)は、CP 7.2%、TDN 61.1%であり、日本標準飼料成分表のイネWCS(黄熟期)の値よりも優れるだけでなく、発酵品質もVスコアで94点と良好である。納入先の牧場から要望を受け、収穫・調製にあたって乳酸菌製剤の添加、微細断収穫機の導入、丁寧なラッピングなどの対応を行っている(写真2)。

ロールの販売単価は、8ロール/10a収穫できれば受託料金を賄うことができる設定であるが、受託圃場の平均収穫ロール数が6~7個/10aに留まっている点が課題となっている。

5. 草地管理

該当なし。

6. 飼養管理

イネWCSが供給されている新見市における大規模畜産農家の利用状況は次のとおりである。

飼養頭数は繁殖和牛 440 頭、哺乳・育成牛 550 頭、肥育牛 1,000 頭の和牛一貫経営でブランド牛である「千屋牛」を生産している。イネWCSについては、10年以上継続して給与している。現在、ウエストカントリーから300ロール、その他は県南からロールを購入している。

ロールへの獣害もあるが、廃棄量は少ない。イネWCSの嗜好性は非常に良好で安定している。すべての牛に給与したいが、牛舎構造の課題があり対応できていない。育成期にはイネWCS(概ね原物 5kg/日・頭) + 乾草、一部、キノコ菌床残渣を給与している。肥育期は、肉質管理のためにイネWCSは給与していない。

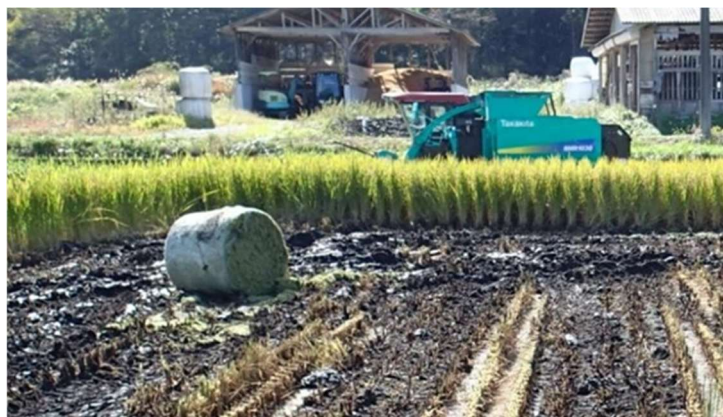


写真2. 微細断収穫機体系によるイネWCS収穫調製作業(右上は自走式ラッピングマシン、右下は自作のロールキャッチャー。収穫機1台に対して通常は2台のラッピングマシンでの作業が効率良いが、狭い圃場が多いためラッピングマシン1台でも作業が間に合うことが多いという。ユニック付きトラック+自作ロールキャッチャーの組み合わせによるロールの運び出し・運搬作業が機械費低減に効果的である。)

7. 放牧管理

該当なし。

8. ふん尿処理

家畜堆肥は、地域の堆肥センター（肉牛：5戸、養鶏：3戸、養豚：2戸から構成）を介して入手しており、WCS用イネには約2t/10a使用している。ただし、ウエストカントリー自体は堆肥製造、散布に関与していない。

9. 地域との連携と普及性

異業種からのコントラクター事業への円滑な参入例であり、条件不利地である中山間地帯の畜産農家を支える支援組織として、地域に不可欠な存在となっている。また、ウエストカントリーは農協や行政機関との連携がしっかりしている点も大きな特徴であり、強みでもある。さらに、コントラクター協議会の会員であり、岡山県内や県域を越えたコントラクター組織との連携を図りながら、地域における飼料生産事業の維持と、さらなる発展を目指している。

ブランド「千屋牛」の振興を目指して、地域が一丸となり、生産者と関係機関の明確な役割分担と連携により活性化を図っている好事例である。

以上